

## おっぱい委員 最終話

### プロット①

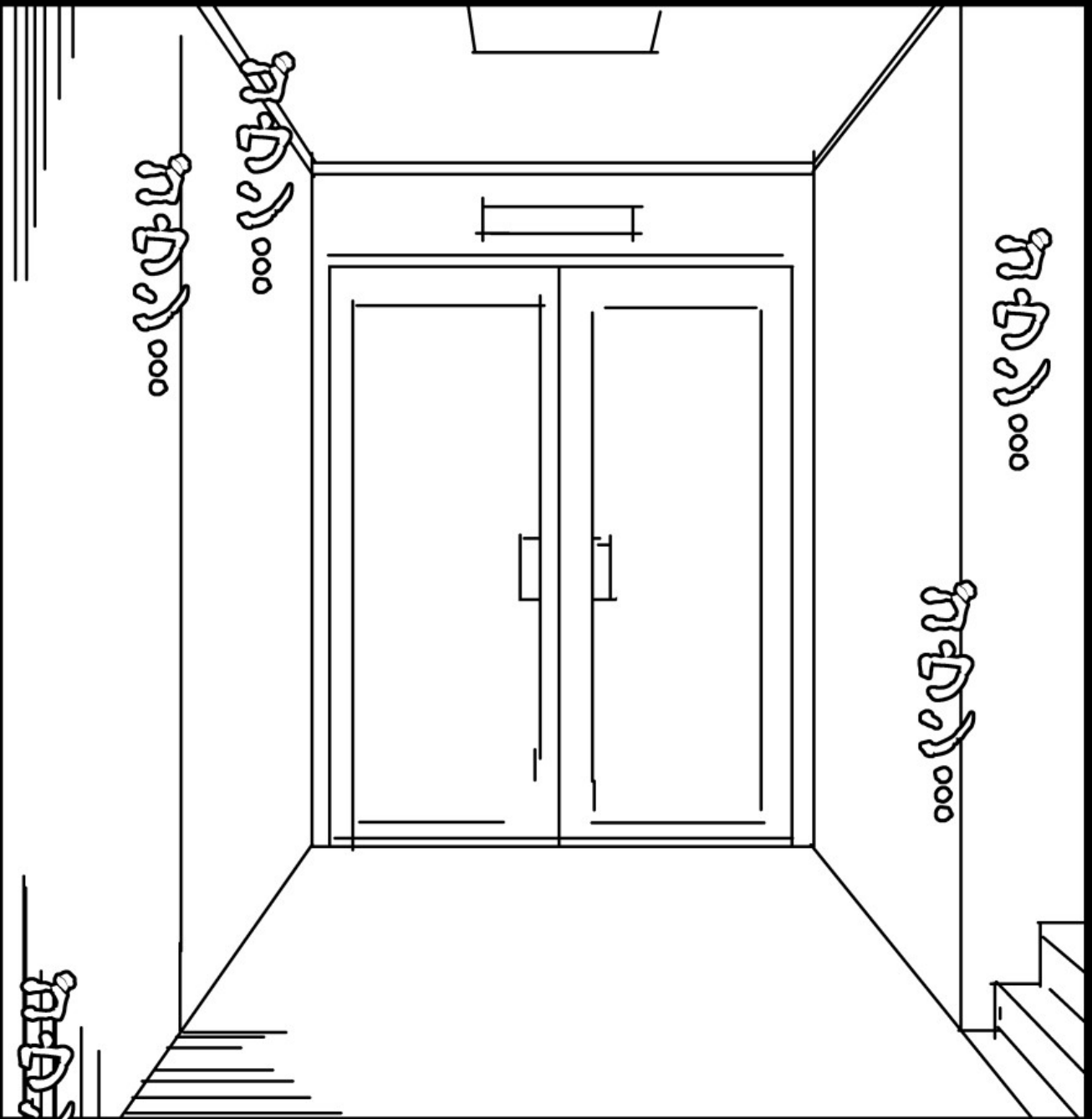
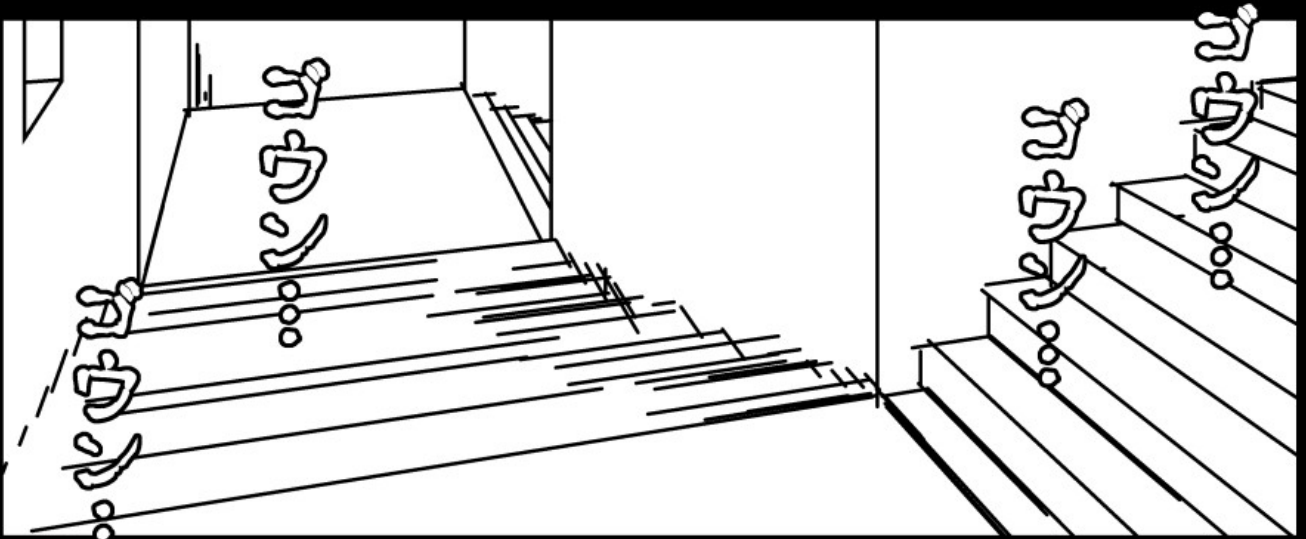
学校内で部外者と淫行をしていた罰として特別懲罰室に入れられた想子は「おっぱい」の再生能力テストと称して身体に電流を流されるなど科学者から実験用モルモットのような扱いを受けていた。

そんな想子を見ていられず、想子の母(真理杏)は学校に想子を解放するよう直談判をするが、教師は取り合ってくれない。

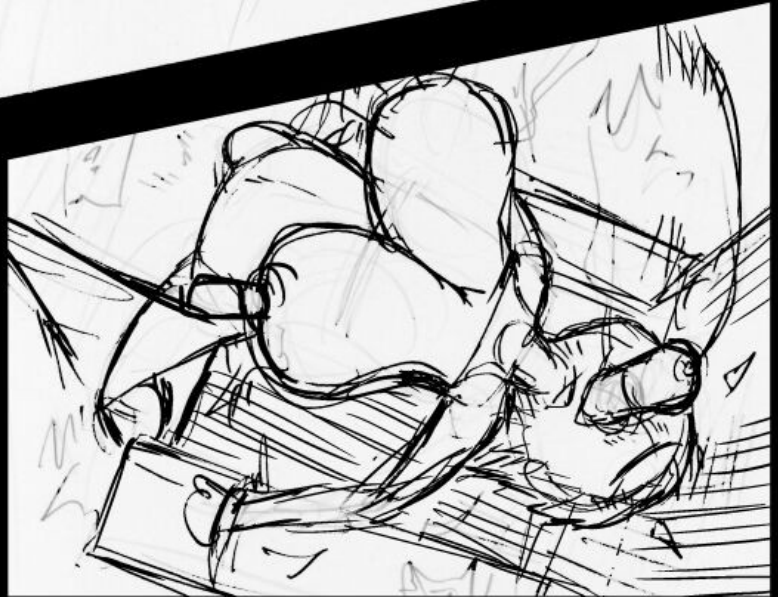
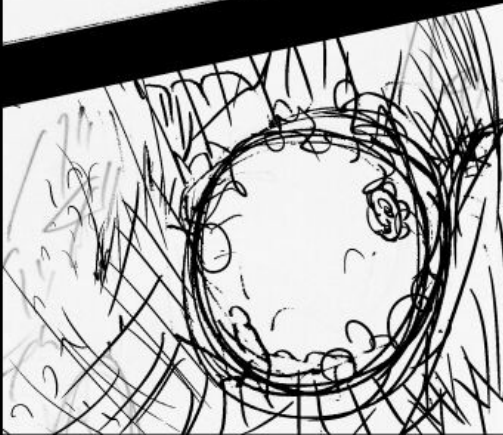
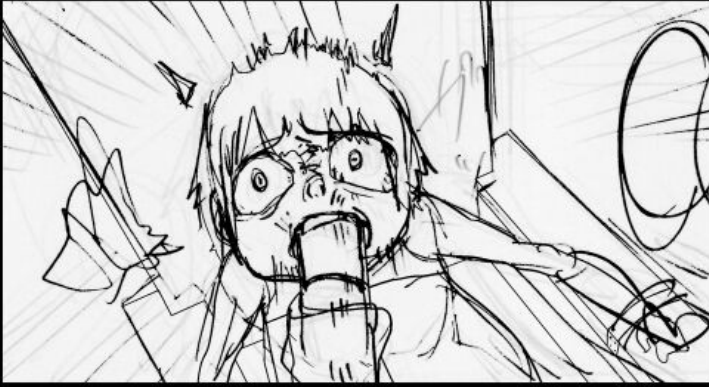
連日にわたる壮絶な暴力的懲罰によりボロボロになった想子は「おっぱい」の再生能力による過度な復元によって胸はいびつに膨らみ、髪は伸び、目玉が不自然に大きくなり、心身ともに、少しずつ人間らしさを失っていった。

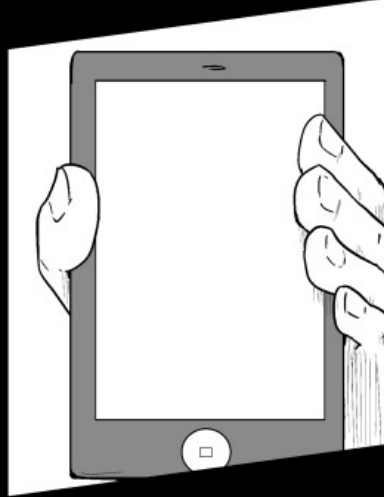
想子の親友である亜樹は、想子に優しくしていたことから、学校中に迫害されるようになる。

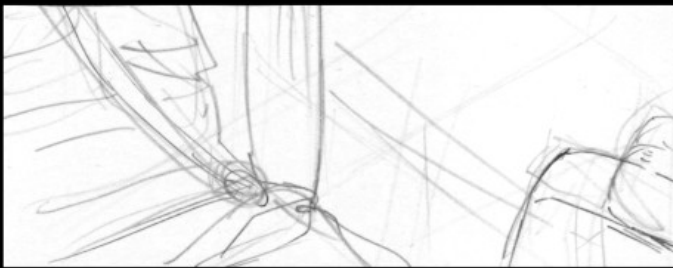
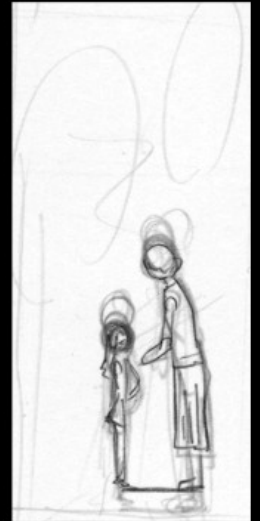
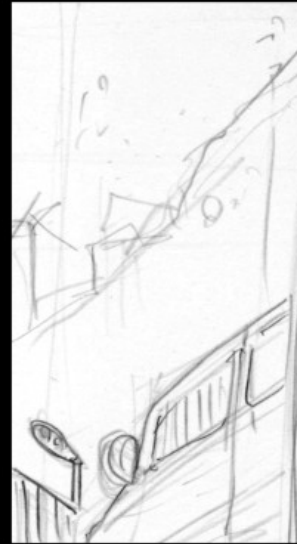
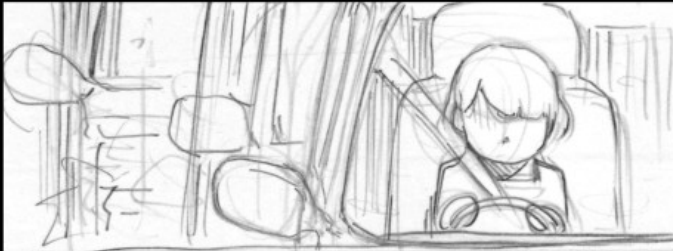
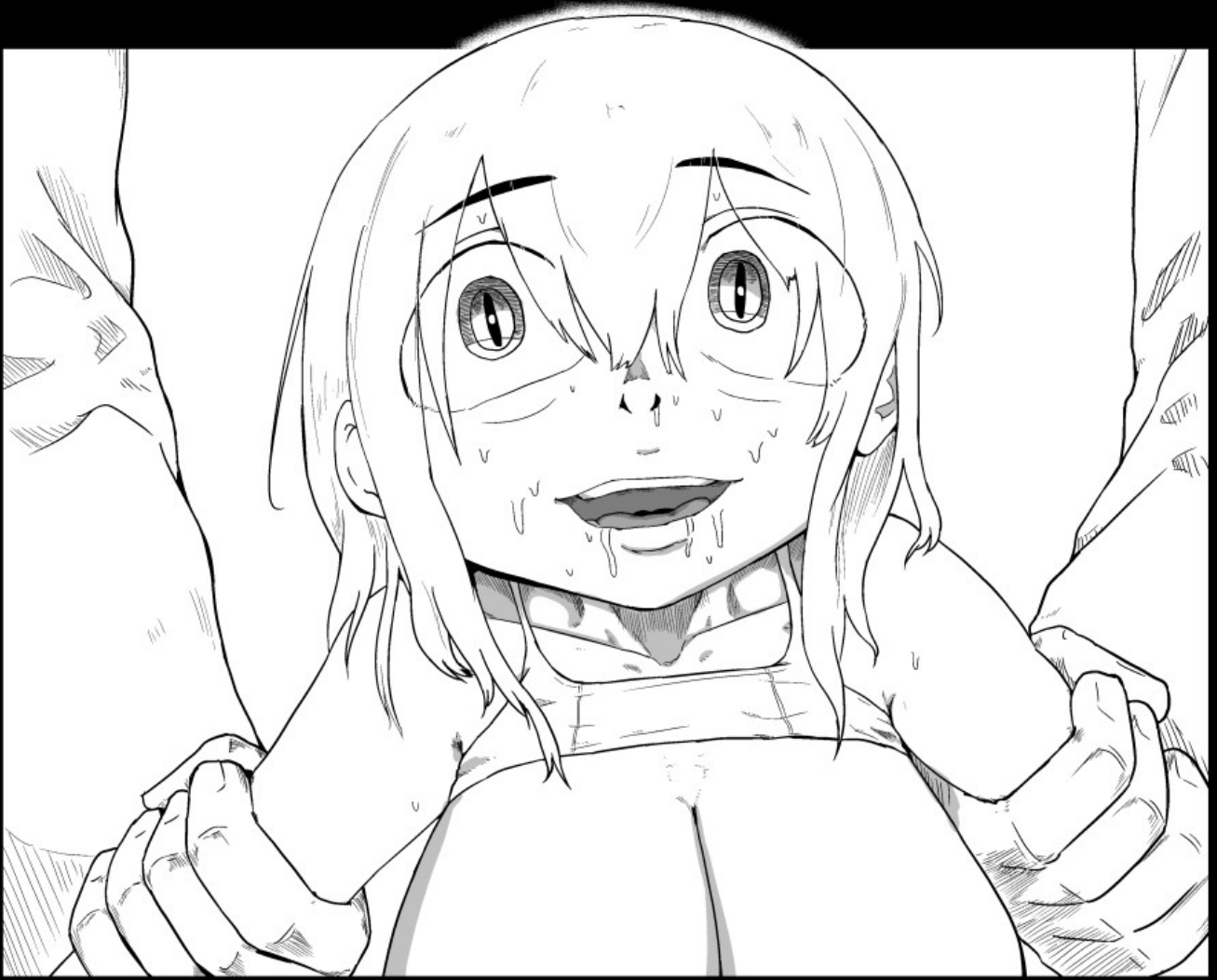
学校内での想子への暴力は日増しにエスカレートしていく。単なる性行為から、殺人衝動のはけ口へ。今までのような学校生活は送れず、毎日死ぬ思いをしながら、「おっぱい」の再生能力のせいで死ぬことが出来ない想子は壊れゆく心の中で、いつしかこの異常な世界を受け入れ、ただ死んで楽になることだけを望むようになっていった。

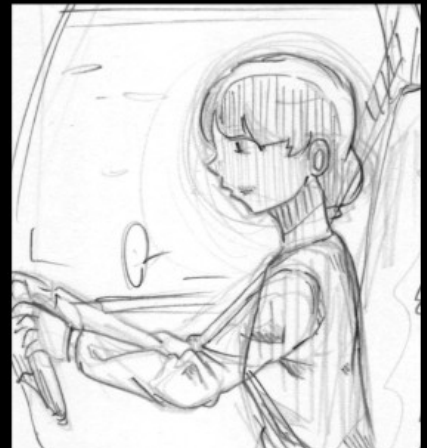
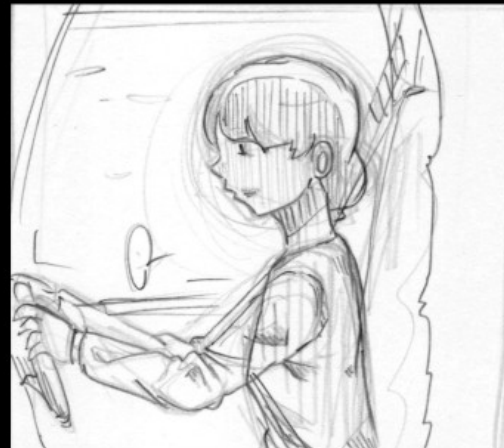
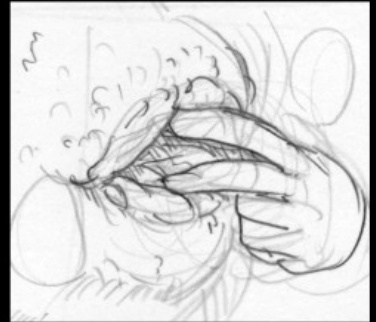
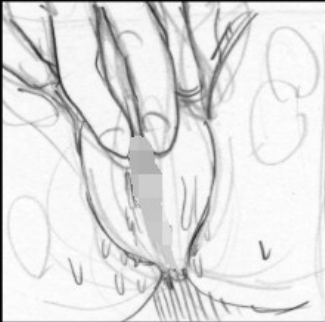
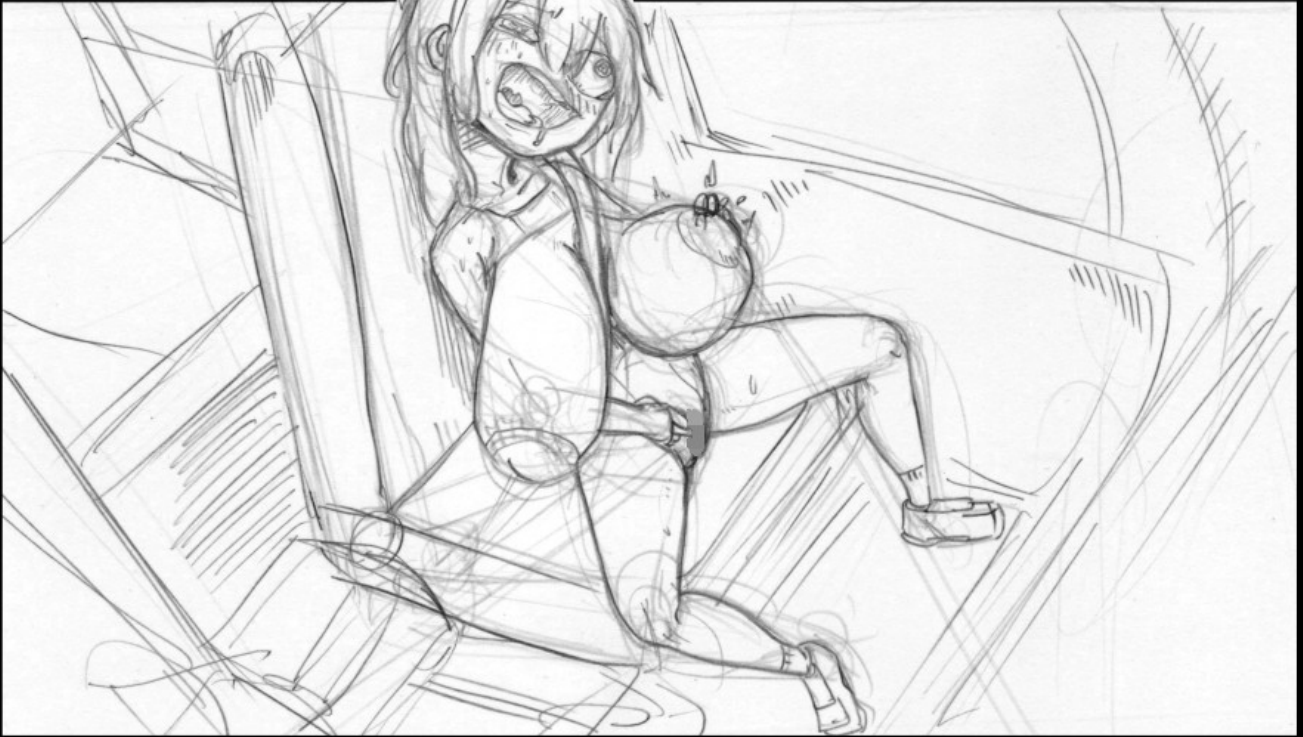
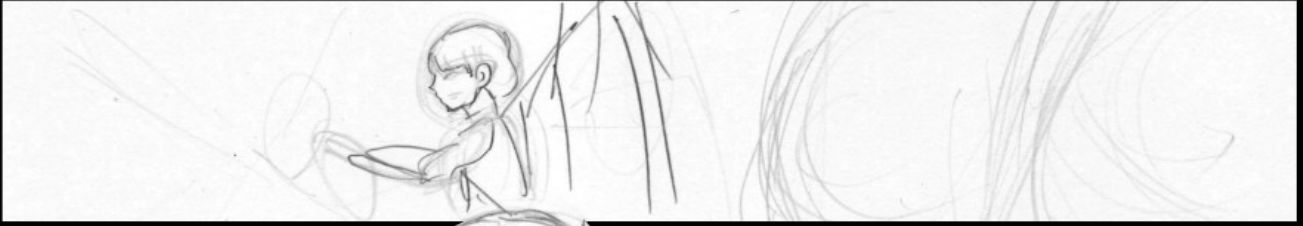


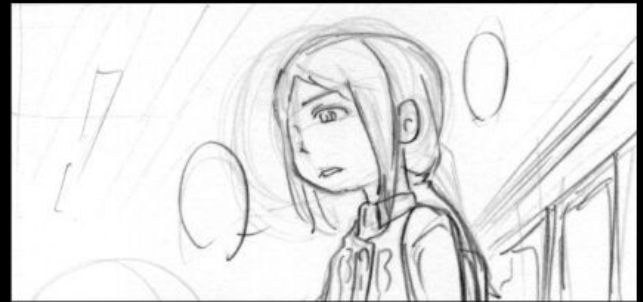
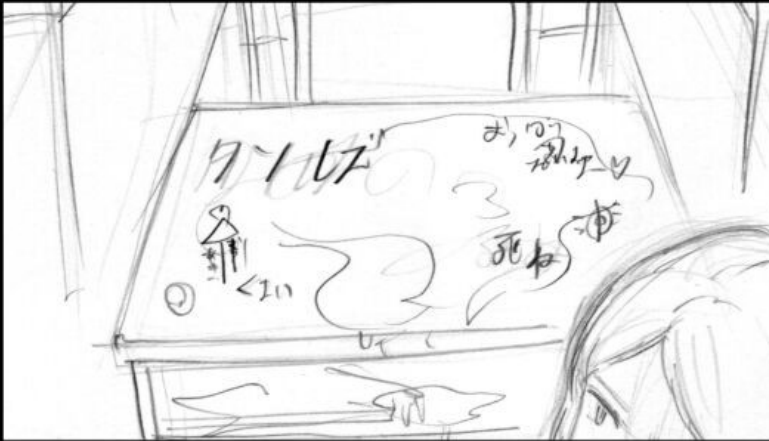


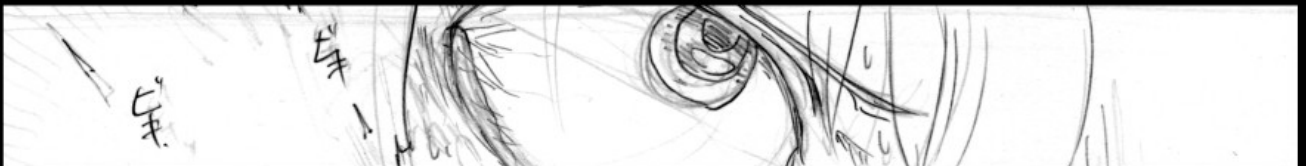


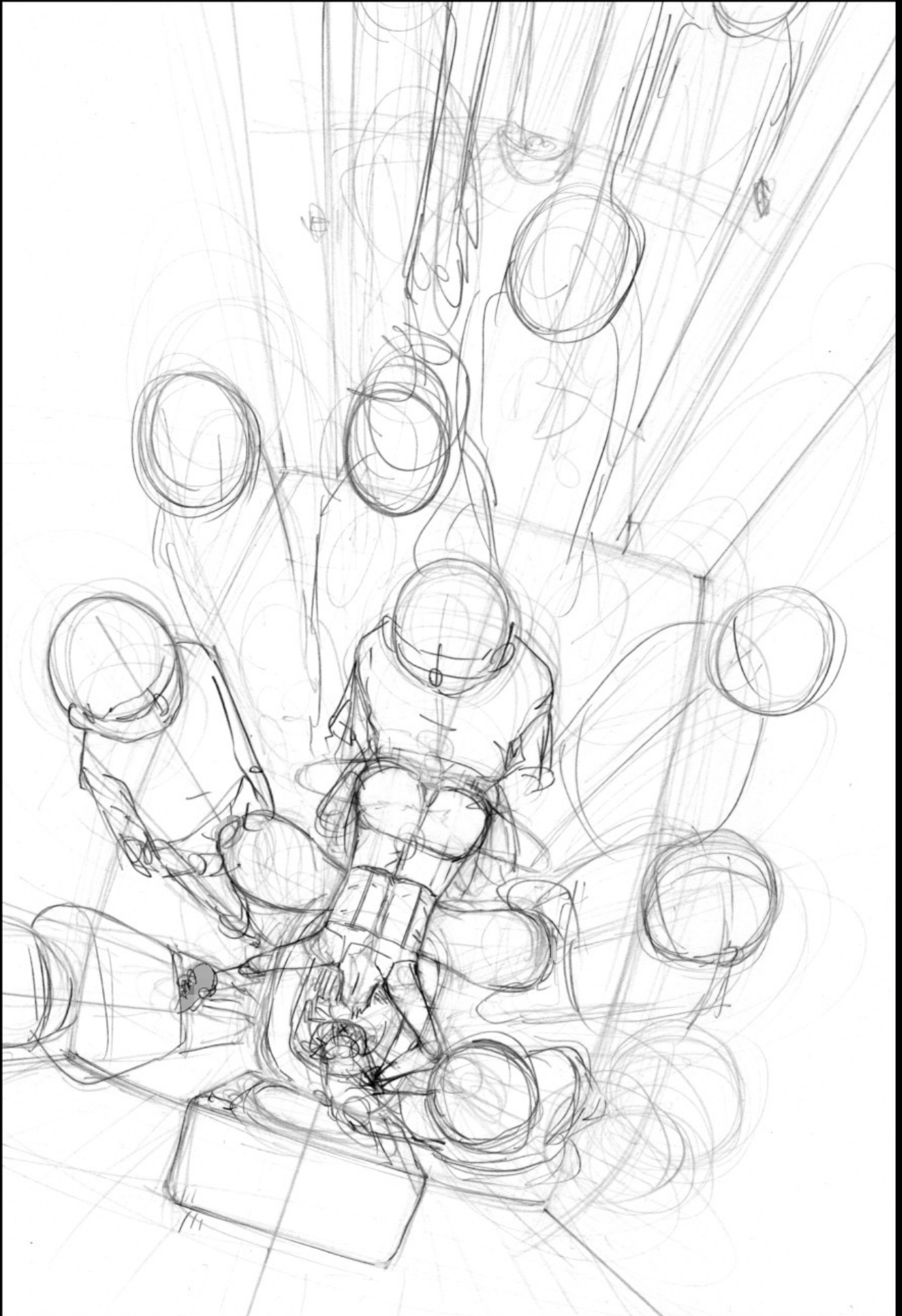


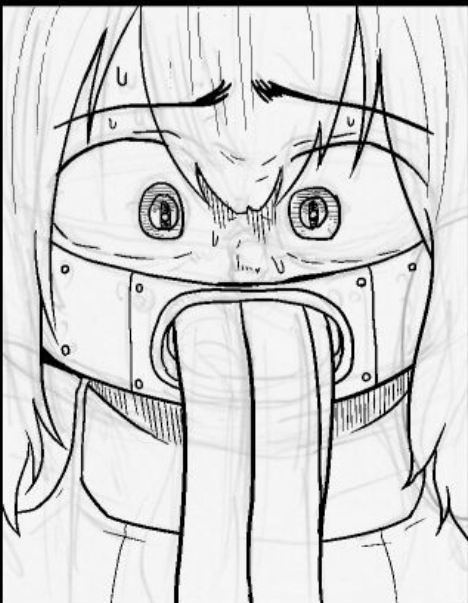
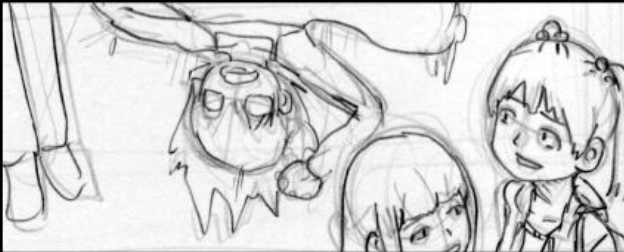
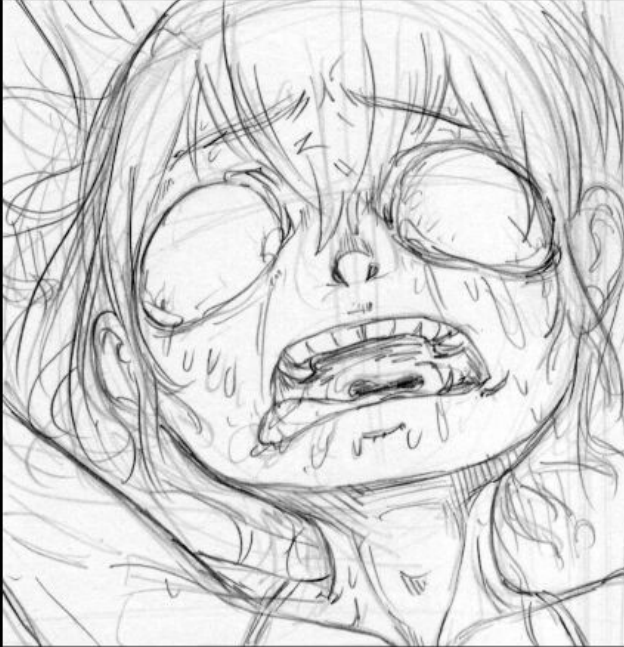
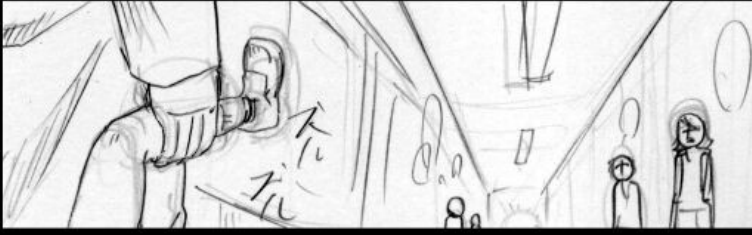


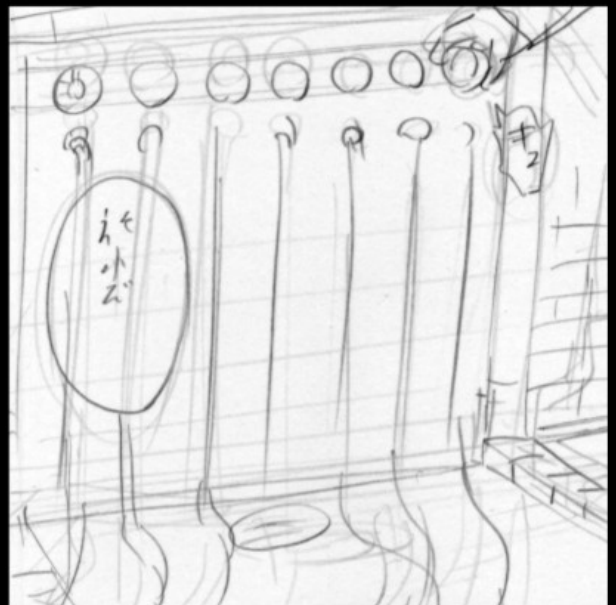
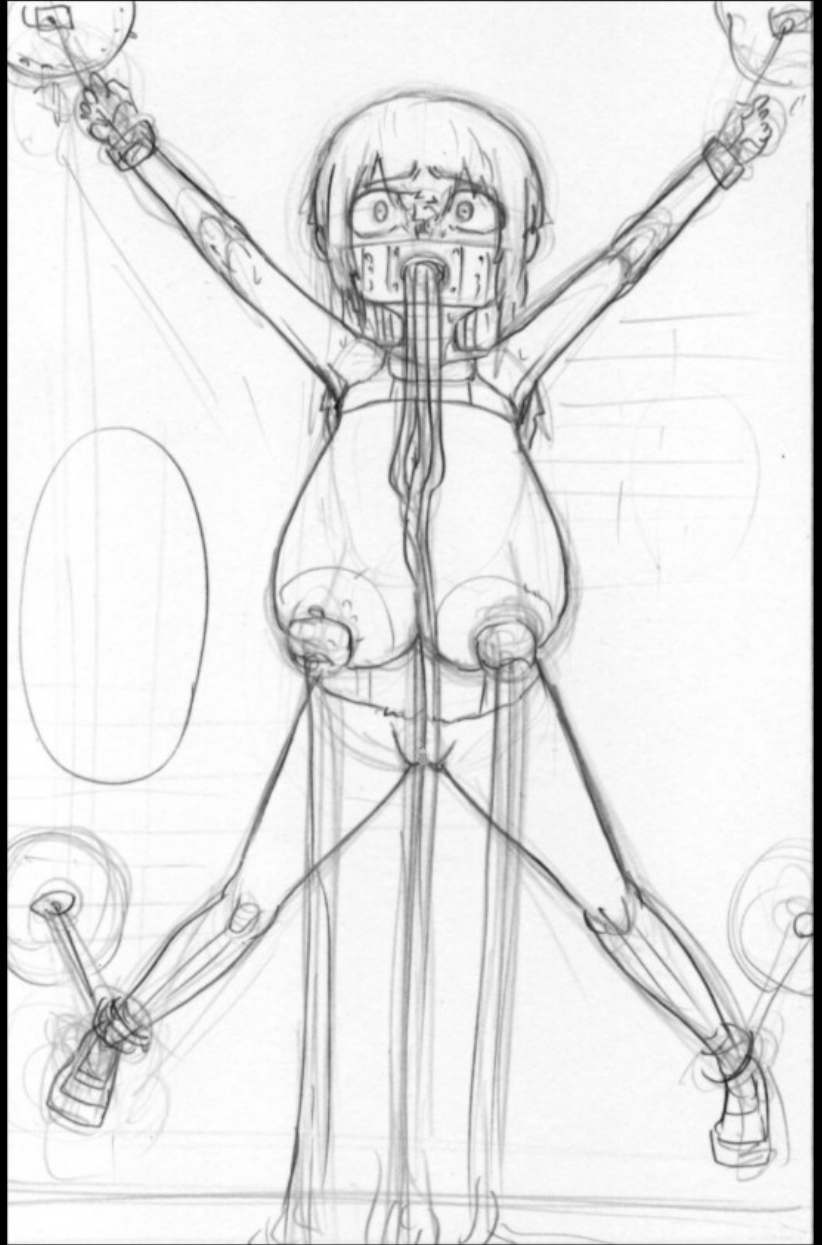
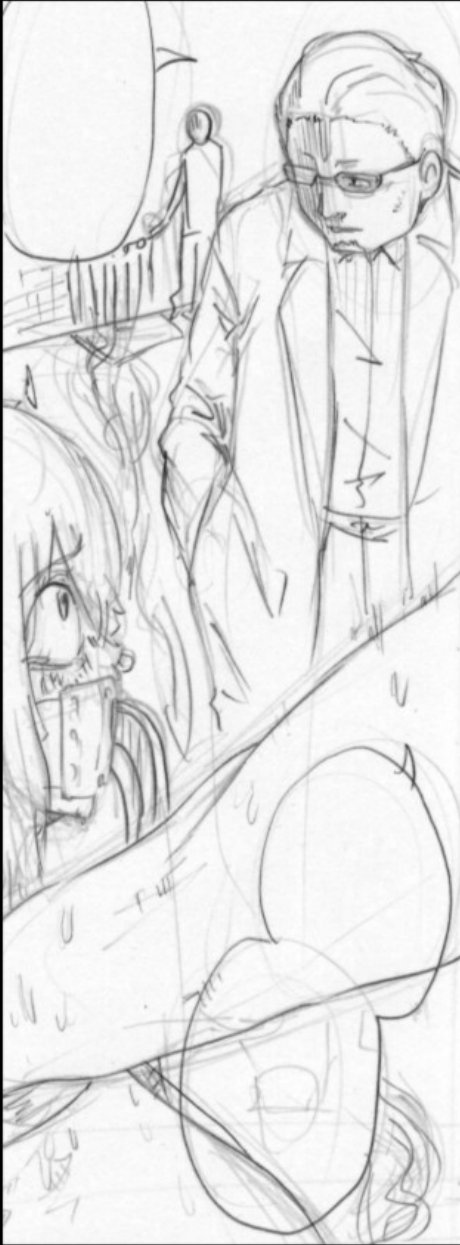


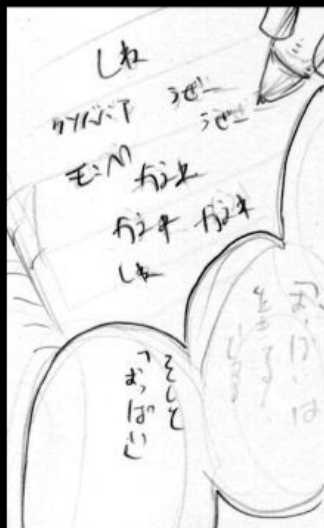
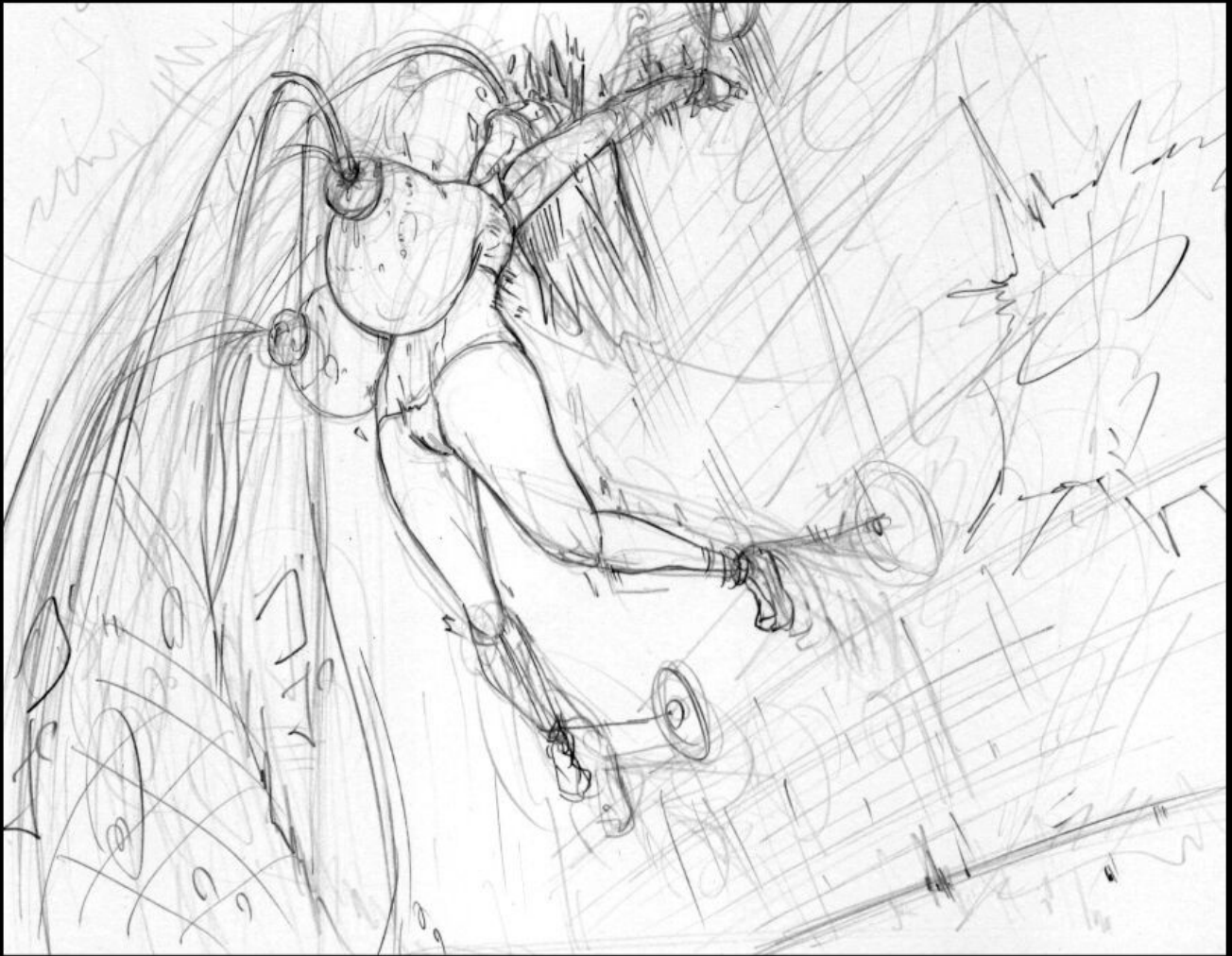


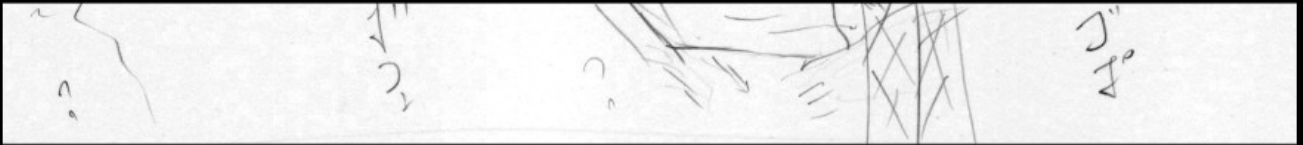
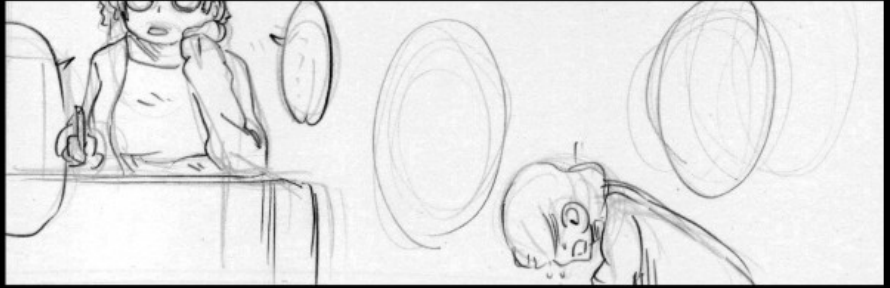


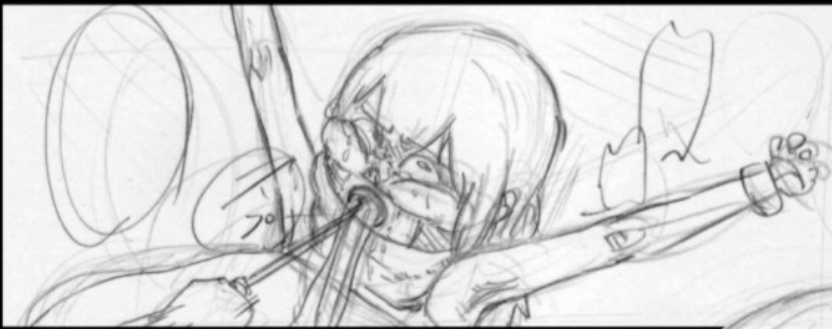
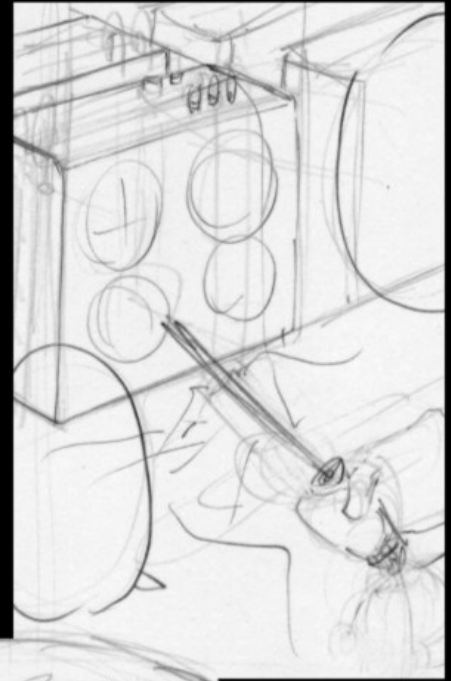


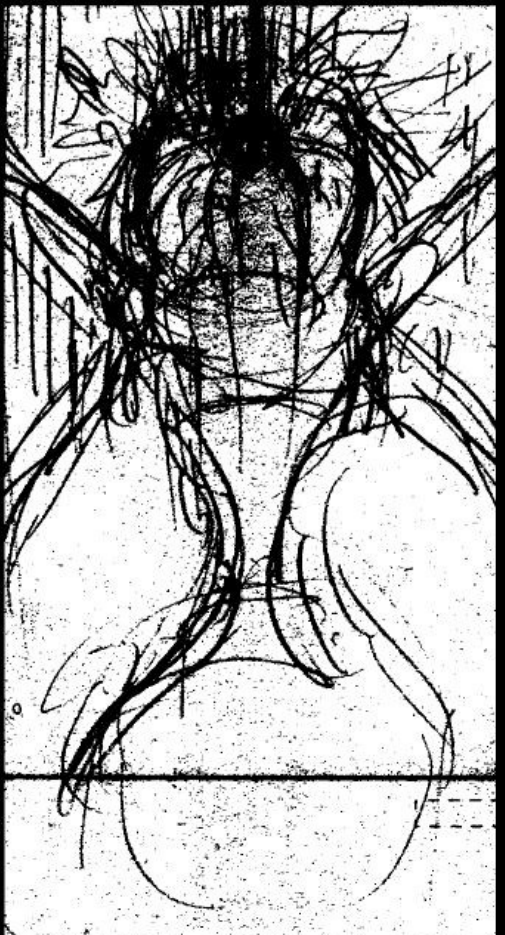


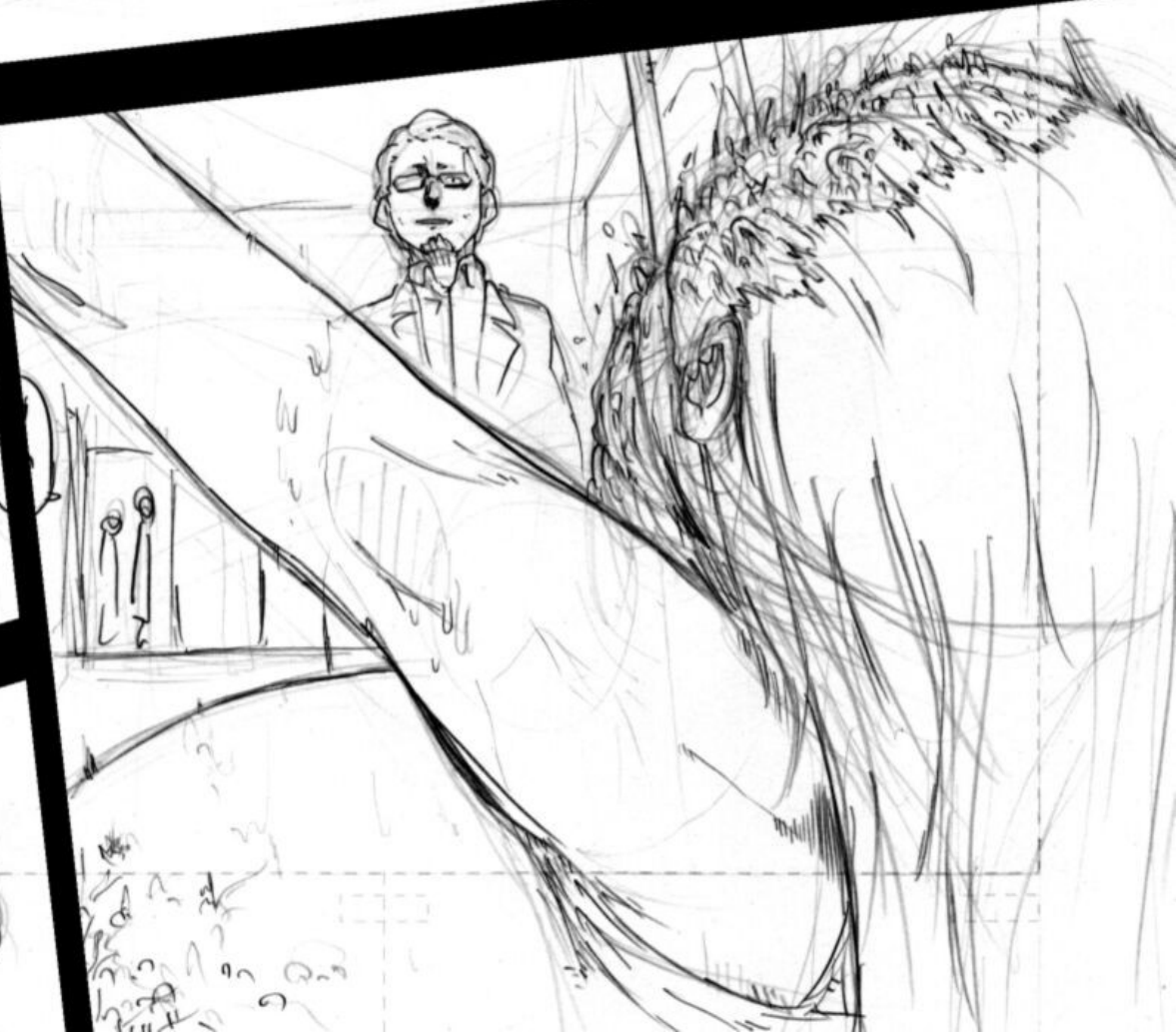
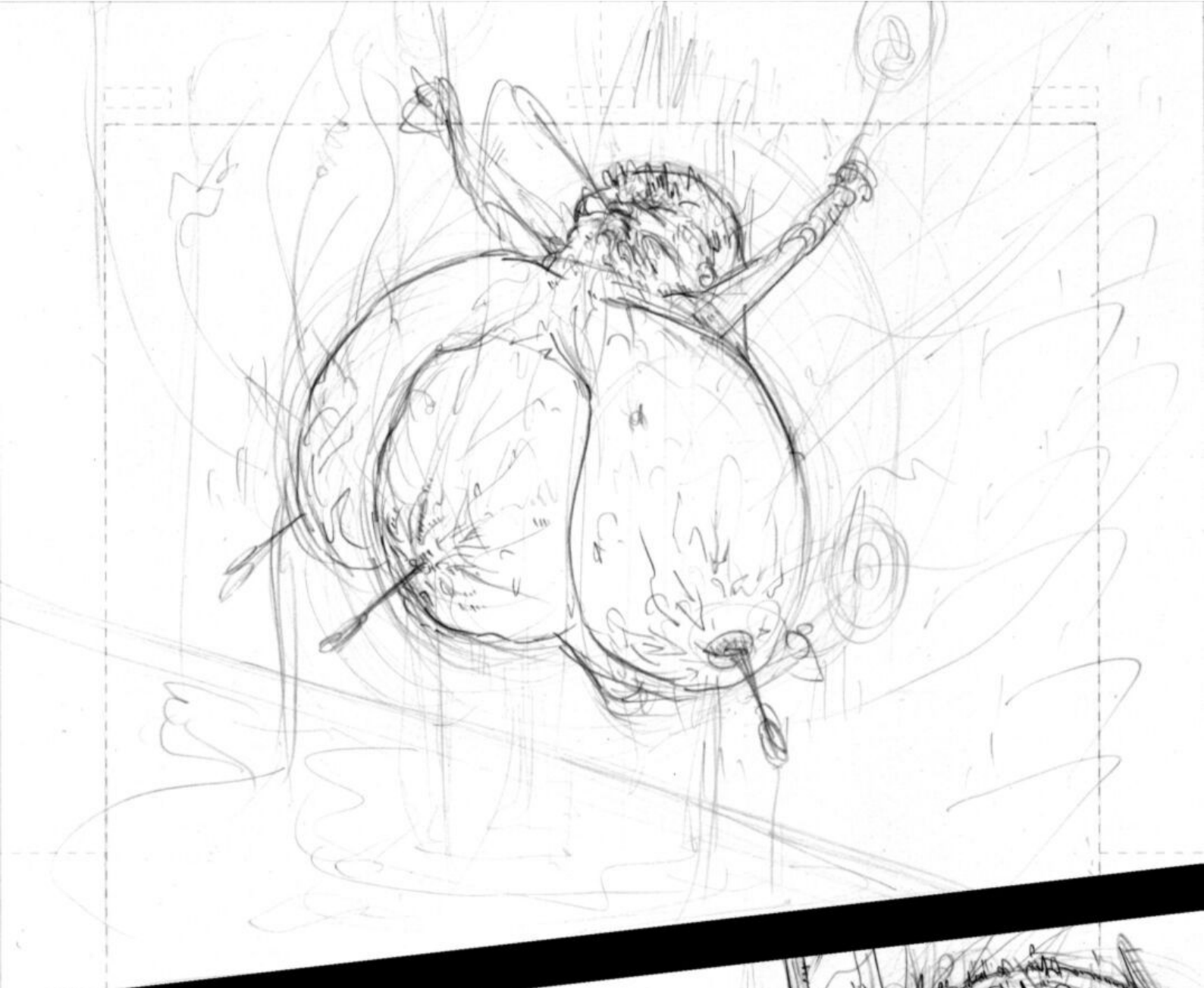




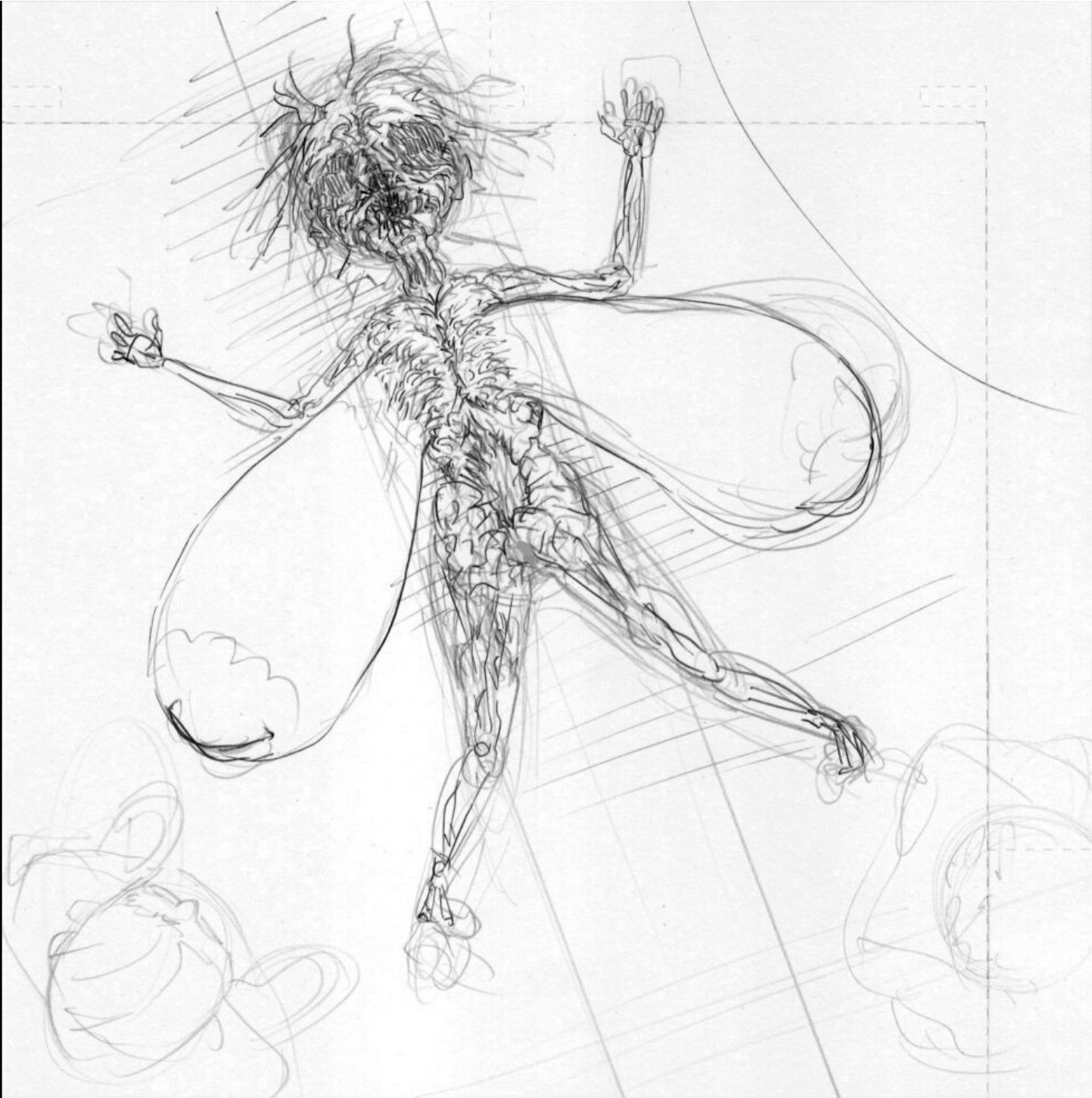


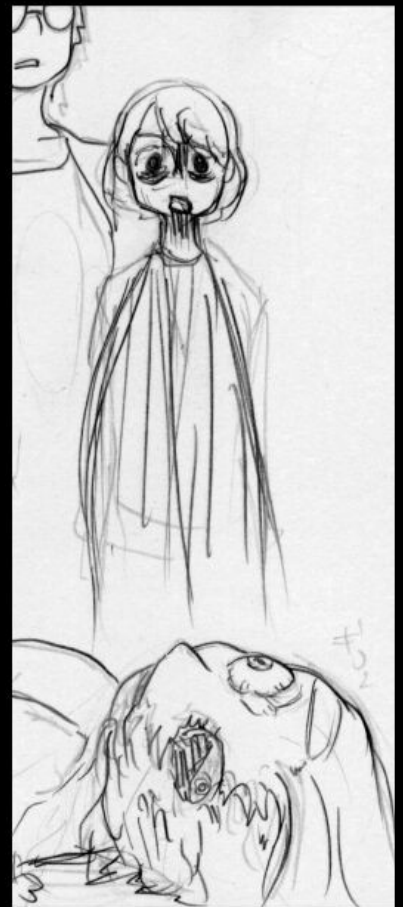
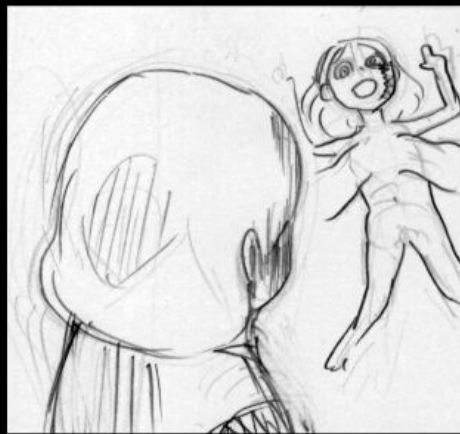












## おっぱい委員 最終話

### プロット②

今までで一番惨たらしい懲罰(電流実験)を受けた想子。  
「これで死ねる…」という望みは絶たれ、  
焼けただれた身体は瑞々しい肌へと再生してゆく。  
何度も復元されたことで身体はいびつさを増し、  
脳は変形し、まともに喋ることすらままならない。

真理杏はそんな想子を見て、ある決心をする。

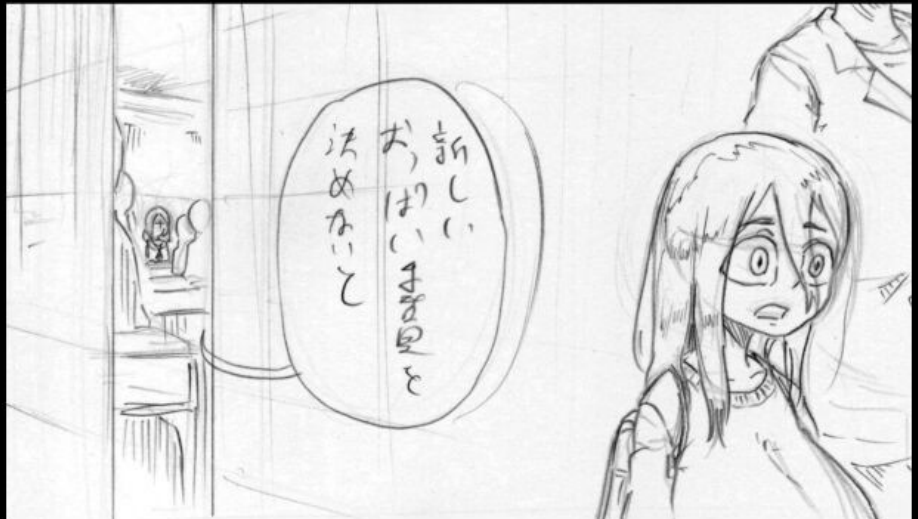
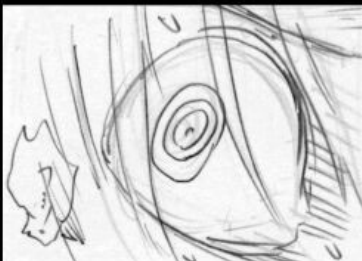
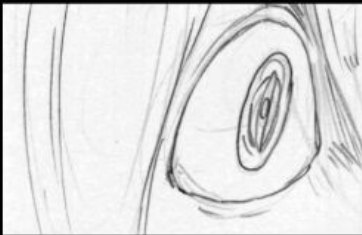
想子の胸には  
無数の「おっぱい」の"種乳首"が植えつけられることになった。  
「おっぱい」は人間を宿主として育つため、  
「おっぱい」を大量生産するためには、人間を犠牲にして  
"母木"にする必要がある。  
本来、"母木"に選ばれるのは死刑囚などであり  
「おっぱい委員」の学生がそのまま"母木"になった例は無かった。  
真理杏は、そこまでして愛娘を守ることを決心した。

こうして、想子は正式に人間ではなくなった。  
学校にいる必要もなくなり、暴力からも解放された。  
真理杏は娘としてではなく、国から譲り受けた所有物として  
想子を持ち帰った。

…想子が学校から去ろうとした時。  
想子のいなくなったクラスから、ある一言が聞こえた。  
「次の「おっぱい委員」を決めないと」







## おっばい委員 最終話

### プロット③

クラス全員の目が、亜樹を見る。

「先生、それならやっぱり投票で決めた方がいいですよ」

「あ、賛成一」

「委員長が言うならそれしかないよねー」

「みんなもそれでいいよね」

「うん」

「恨みっこなしだよーw」

亜樹は狼狽する。か細い嗚咽が漏れる。

彼女は想子の親友であり、迫害されている。

一瞬、脳裏に「想子がはじめておっばいを付けたとき」の映像がフラッシュバックする。

全身に触手が駆け巡り、尋常ではないほど血走った目。

いまから わたしが あれになる。

「それじゃあ今から紙を配ります」

「この紙に一名…」

亜樹は絶叫する。

想子は、亜樹のもとへ駆け寄ろうとするが、真理杏がそれを必死につかんで引き留める。

「おっばい委員になるべきだと思ふ人を 書いてください」



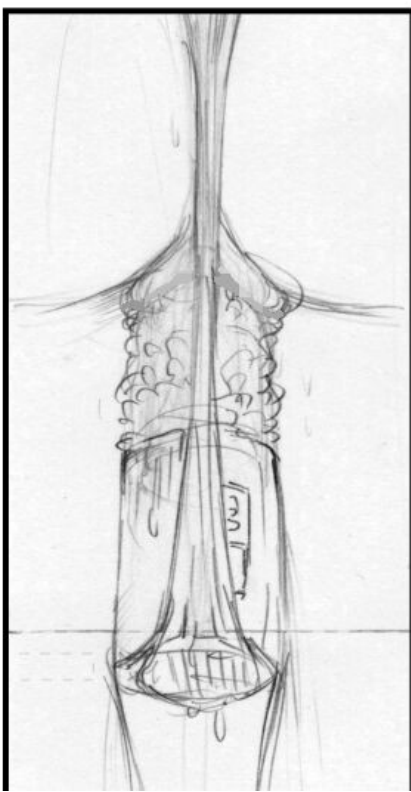
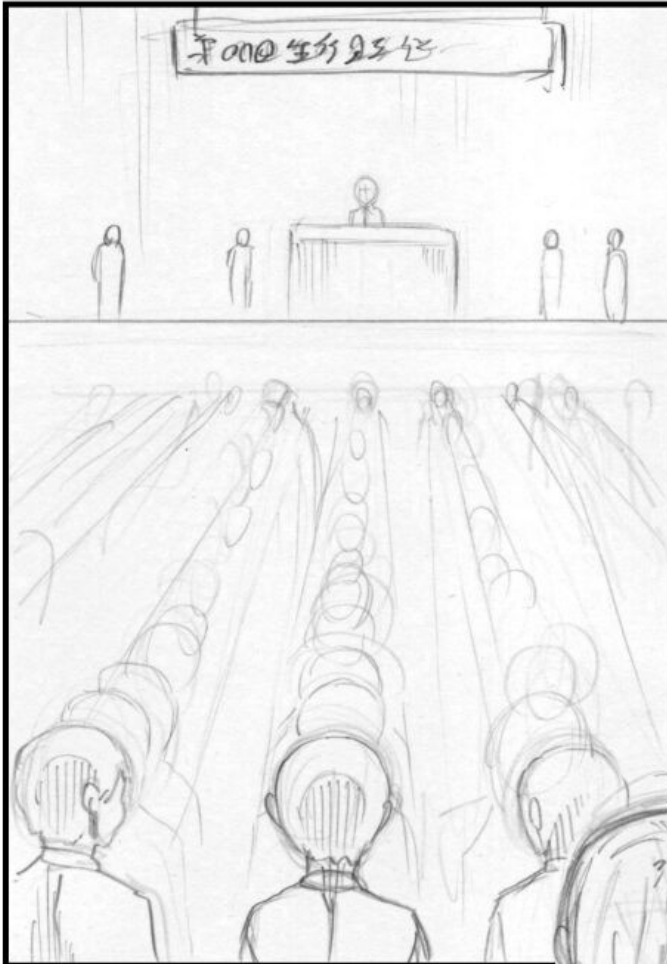
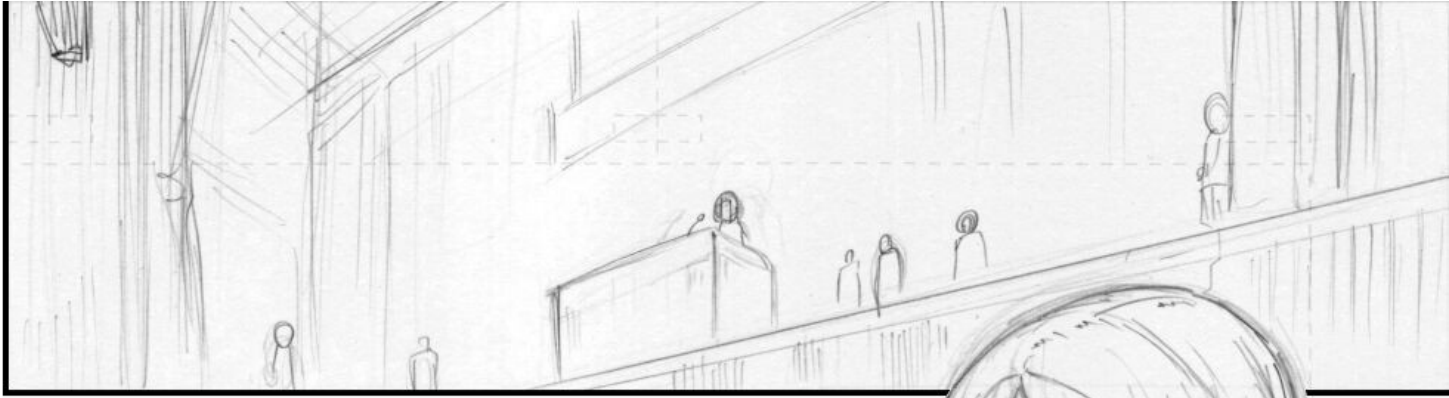


おっぱい委員に  
なるべきだと  
思う人を



書いてください

数年後



## おっばい委員 最終話

### プロット④

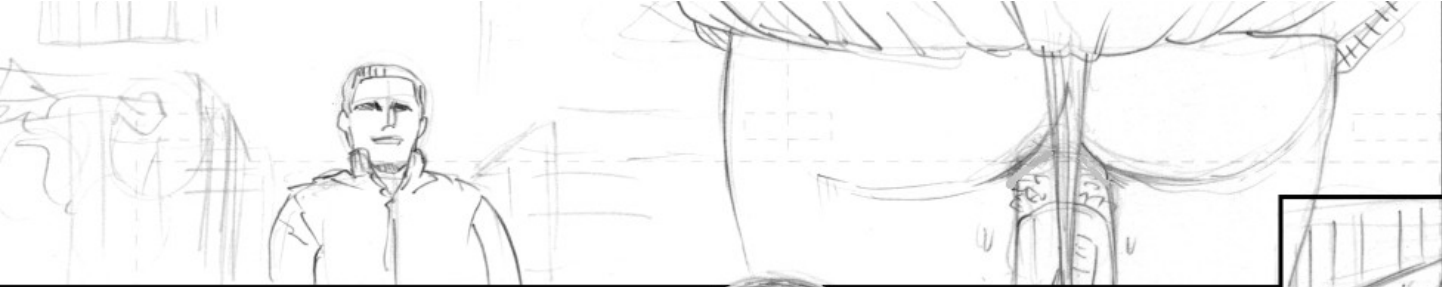
ある学校の全校集会。成長した亜樹が壇上に立っている。  
新しい生徒会長としての所信表明をする亜樹。  
しかし、それを聞く生徒たちは、ある噂をしていた。

「あの遠山亜樹とかいう生徒会長、おっばい委員だったらしいぜ」  
「同じ学校だったやつが、  
あいつにちんこ入れたことあるっていった」「マジ？」  
「しかもあいつ、今も教師とやってて  
生徒会長もそれで選ばれたとか…」「枕営業じゃん」

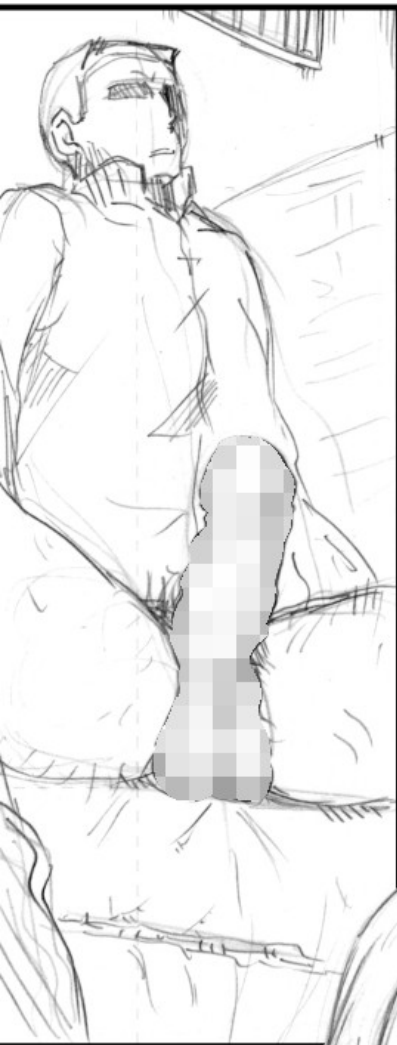
それは事実だった。  
壇上の亜樹のスカートの下にはバイブが仕込まれていた。

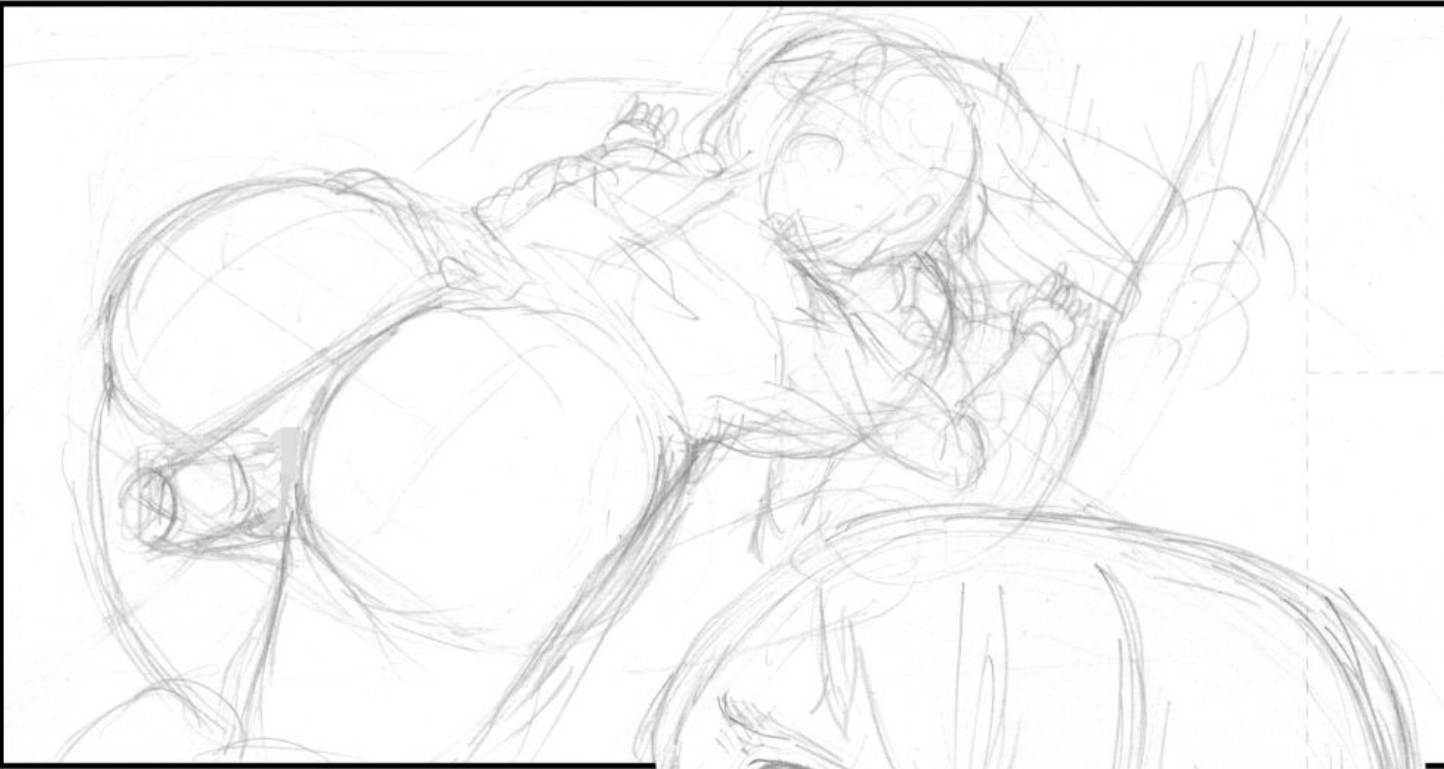
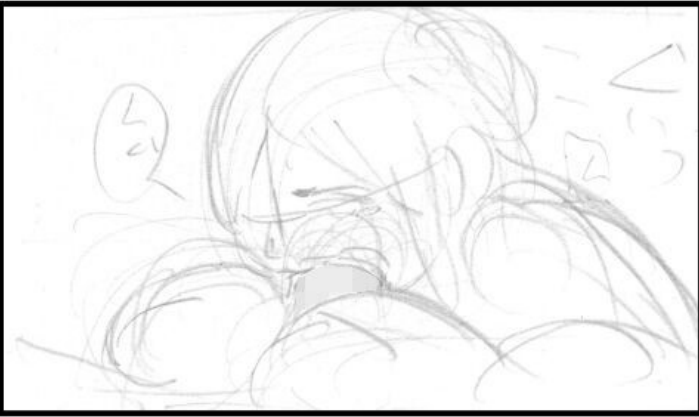
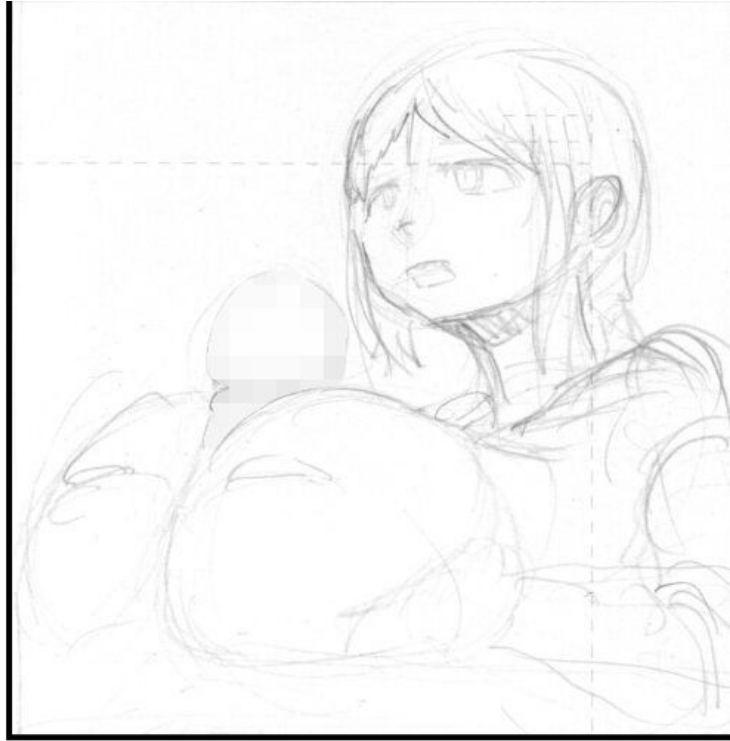
集会の後、亜樹は体育倉庫で教師と密会する。  
バイブは教師の命令だった。  
教師の言うままにパイズリ、フェラをする亜樹。  
慣れた手つきだったが、次第に教師が暴力的になる。  
髪をひっつかみ、太い陰茎を亜樹の喉奥まで強引に捻じ込む。  
顎が外れ、目が裏返り、少女とは思えないほど野太い  
水音混じりの嗚咽を吐き出す亜樹。  
ほとんど殺しても構わないというような野蛮なイラマチオ。

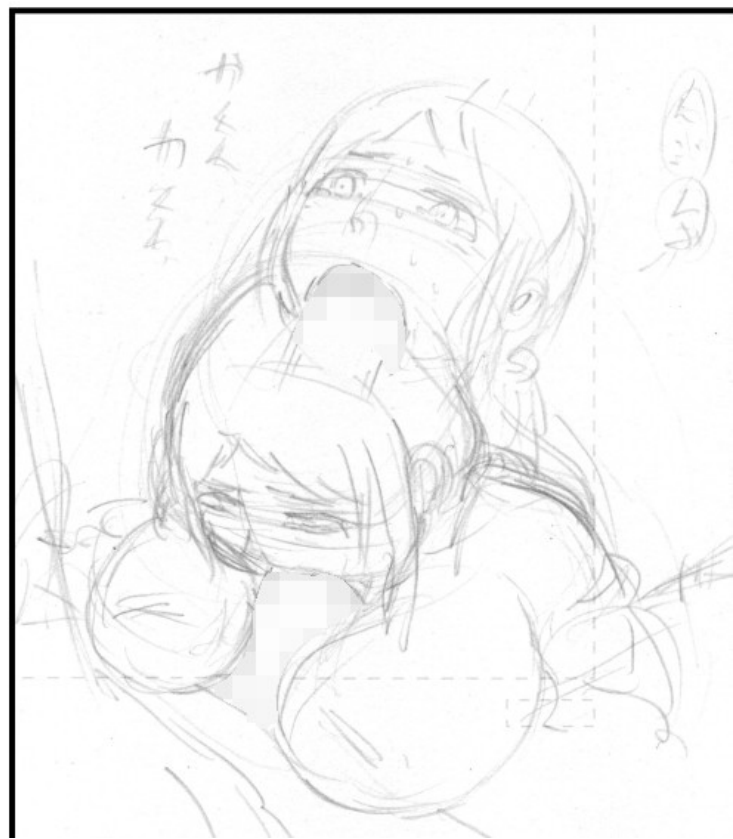
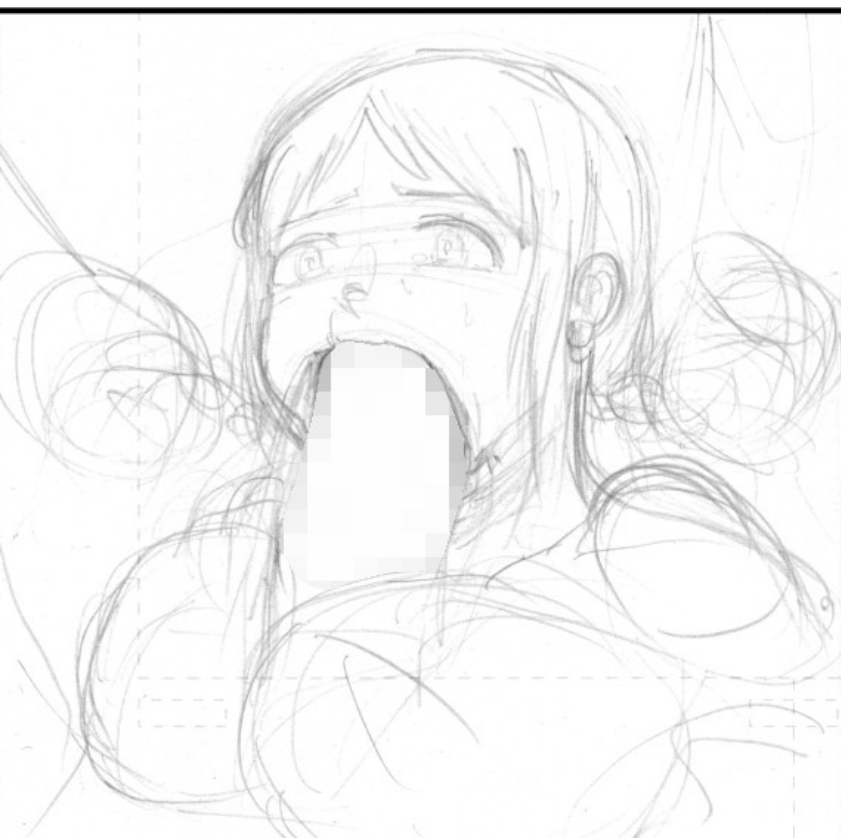
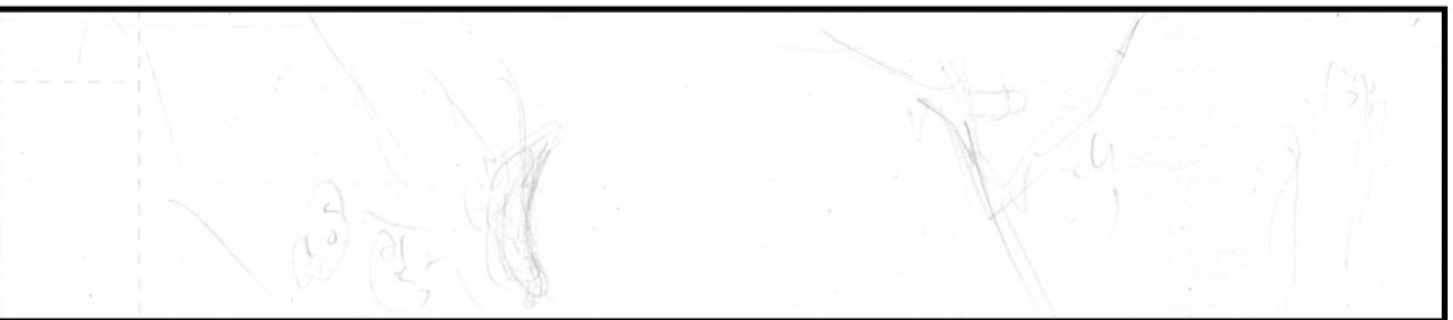
亜樹は、生徒会長になるために  
進んで理不尽な暴力を受けることを選んでいた。

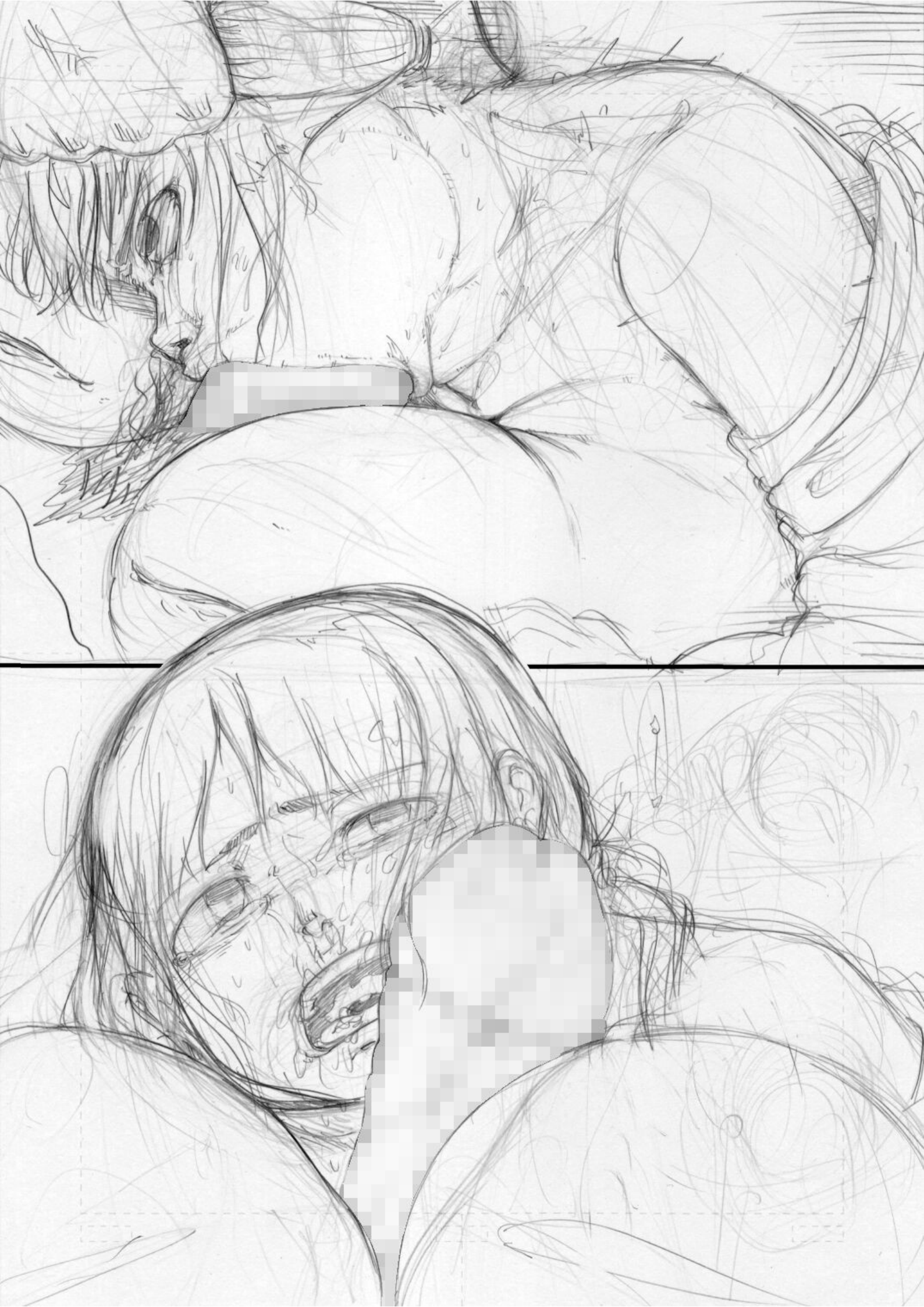


体育会庫









## おっばい委員 最終話

### プロット⑤

放課後、亜樹はケーキ屋へと立ち寄る。

「お誕生日ですか？お名前は…」

「"そうこ"でお願いします」

ケーキをもって亜樹が向かった先は、郊外の寂れた平屋だった。

軒先には「大上」と書かれている。

平屋には一軒のバンが止まっており、

玄関先で大きい男二人が、家主の老女と話している。

老女はやせ細り、髪は白く薄く、服はボロボロで色あせている。

「大上さん、あんたも借金とかあるんでしょう」

「娘だかなんだか知らないけど、しっかり収穫してもらわないと」

「ごめんなさい…来週には予定数納品いたしますので…」

男二人は機嫌悪そうにバンに乗り、帰っていく。

老女は唇を噛みながらぶつぶつと不満を漏らしたあと、

亜樹に気付く。

「あきちゃんじゃない！よく来てくれたわね」

「今日、想子の誕生日でしたよね」

「ええ… わざわざケーキまで…」

老女は想子の母・真理杏だった。

既に離婚しており、苗字は旧姓になっている。

亜樹は、想子の母がケーキを見て「これで二日はしのげる…」と

つぶやいたのを聞いた。

## おっぱい委員 最終話

### プロット⑥

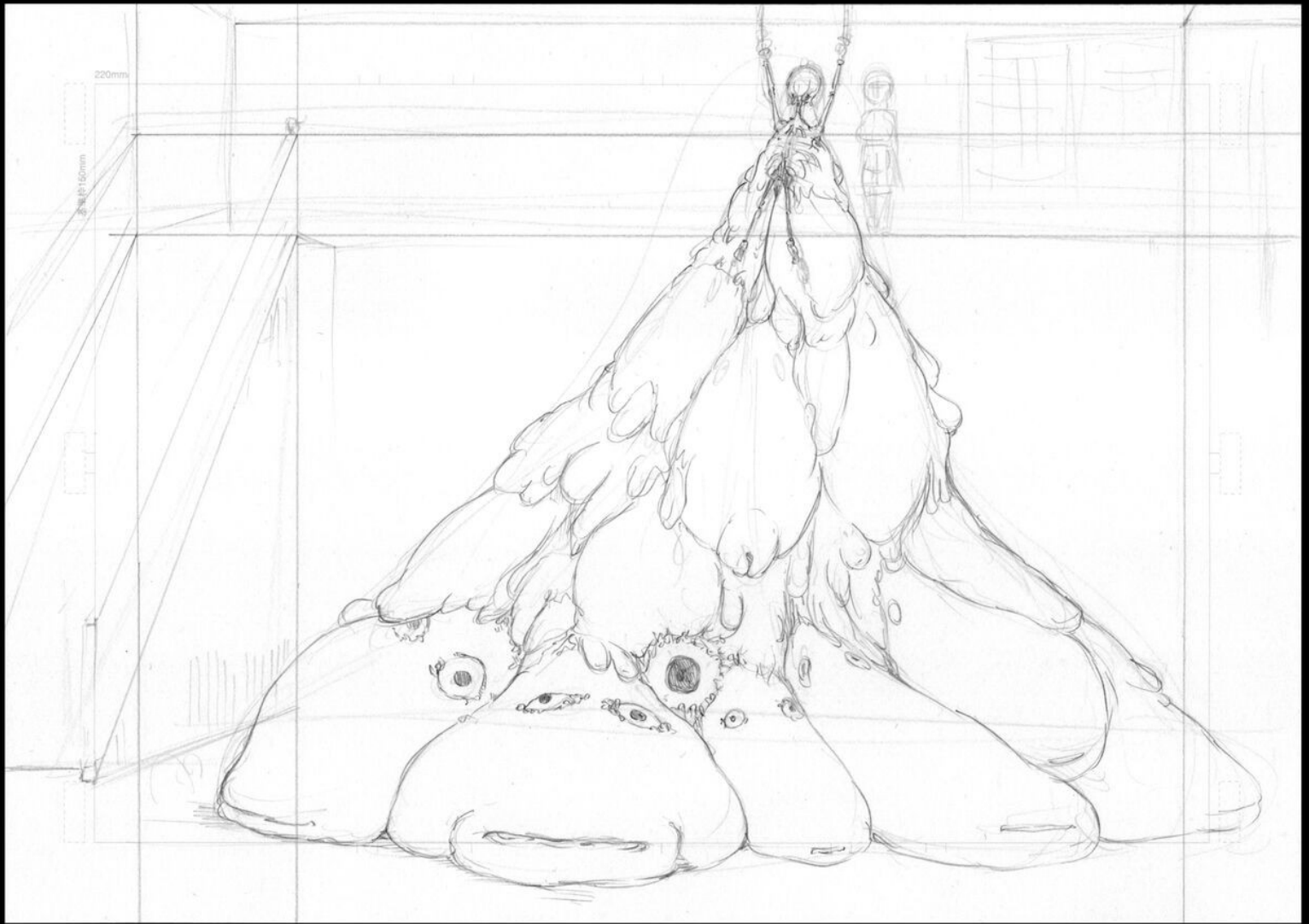
平屋の中は荒れて、ほとんど片付いていない。  
あちこちにゴミや大量のブラジャーが散乱している。  
亜樹と真理杏は、地下へと向かう。  
「想子は、元気ですか」  
「…ええ。最近をよく私の話に反応してくれるの」

地下室。  
亜樹は、"想子"に対面する。  
「想子」  
"想子"は小さなうめき声をあげる。  
「誕生日おめでとう。小さいけど、ケーキ買ってきたよ」

"想子"は、すでに生物の形すらしていなかった。

真理杏は、収穫できずに巨大に膨れ上がった「おっぱい」を見て立ち尽くす。  
本来、「おっぱい」の収穫は、人間の胸に合ったサイズまで育ったら刈り取るのだが、真理杏は手際が悪く、刈り取り残した「おっぱい」を収穫できないまま放置して、2メートルほどまで巨大化させてしまっていた。  
全ての「おっぱい」が巨大化して収穫に適したサイズのものがいないので、新たに種乳首を足して「おっぱい」を育てる。  
しかし真理杏は人間サイズに育ったいくつかの「おっぱい」を収穫したらそれ以外の「おっぱい」をまた放置してしまう。  
そして残った「おっぱい」はまた巨大化する。もはや収集がつかない。  
母親一人の手で乱雑に管理されたままの"想子"は、無尽蔵に肥大化を続けていた。

真理杏は立ち尽くし、泣きながらつぶやく。  
「どうして… どうしてこうなっちゃったの…？」  
"想子"はただうめき声を上げるだけだった。



## おっばい委員 最終話

### プロット⑦

亜樹は"想子"に話しかける。

「想子。わたし生徒会長になったよ。約束通り。

これで良い大学に行ける。

そしたら政治家になって、「おっばい委員」制度を無くすために働く。

もう誰も、おっばいなんて無くてもいいようにする。

想子みたいな子を、一人でも無くす。

想子の受けた悲しみ、苦しみを、もう誰にも受けさせない。

そのためにがんばるから。

だから…」

地下室には、「想子」のうめき声と、真理杏の泣き声、

そして「おっばい」への餌を供給するポンプの音が響いている。

亜樹は、それを聞きながら、決意を固めた。

---

数日後。

郊外の平屋で火災が起きたとニュースで報じられた。

全焼した家屋の中から、中年女性の遺体と、膨大な量の肉塊が発見された。

女性の遺体には全身にアルコールが染みついており、

放火や事故ではなく、自殺であるとみて捜査が進められた。

## おっばい委員 最終話 プロット⑧

---

さらに数年後。

とある女性政治家が「おっばい委員」を撲滅する運動を始めたが、賛同者が少なく、運動は広がらず、週刊誌ではその女性政治家の失言や過去の経歴などばかりが報じられ、いつしかその女性政治家は失職。どのメディアでも名前を見かけることはなくなった。

---

これはまだ  
どの学校にも「おっばい委員」がいる時代のお話。

おっばい委員

終